2019／冬

和紙だより

季刊　福井県和紙工業協同組合

■目次

越前和紙への提言　佐藤友佳理さん……4
レポート　「越前装飾料紙シンポジウム」開催……3
特別寄稿　歴史に残る福井・尾張藩札　河野徳吉……2
情報欄……1

―越前和紙への提言―

■佐藤 友佳理（さとう ゆかり）
愛媛県出身。ロンドン・東京でモデルとして活動。桑沢デザイン研究所卒業後、自身が育った手漉き和紙の産地、内子町五十崎にて、呼吸する和紙「ゼオライト和紙」を開発し、新しい手法の和紙製作に取り組み始める。2012年よりアトリエを名水百選「観音水」の湧く、西予市宇和町明間（あかんま）に移す。オーダーメイドのタペストリーや建築部材・空間装飾などのインテリア和紙のデザイン・製作を国内外に向けて行う。

■佐藤友佳理さん（インテリア和紙デザイナー）「呼吸する軽やかなインテリア和紙」

●素材に興味

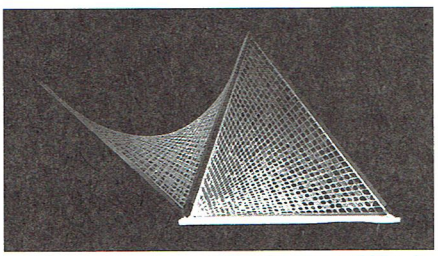
生まれは高知ですが、育ったのは内子町五十崎和紙の産地で、子供の頃から職人さんの姿をよく見ていました。五十崎には毎年五月五日に県無形民俗文化財に指定されている「大凧合戦」という伝統行事があり、中学の頃には、その大凧行事に使われるスポンサー凧の製作をし、和紙に図柄やロゴを描くアルバイトをしたこともあります。

高校時代に雑誌を見ていて、ふとファッションモデルに興味を抱いたのですが、自分が服を着てどうこうよりも、素材や色、服のジャンルといった「要素」をよく見せ、表現できるモデルになれないかと思いました。何事もやるとなったら猪突猛進の性格なので、早速モデル事務所に入り、ファッションショーなどもやりました。東京でも英語専門学校に通いながらモデルを目指しましたが、自分が求めていた方向性となかなか合致せず今度は裏方に回ろうと、ロンドンで語学学校に通った後、メイクアップスクールで一年勉強し資格も取りました。ロンドンでは様々なアーティストやその道のプロと知り合いになり、次第にファッションショー、化粧品の広告や「コスモポリタン」や「タイム」誌などの雑誌モデルの仕事もやるようになりました。前衛的な仕事やクリエーターと多く出会い、そういった空気を大いに吸ったと思います。如何に自分という素材を見せるかなど、効果的なプレゼンテーションも研究していました。

●ゼオライト和紙の開発

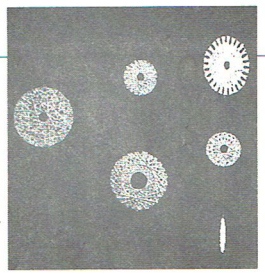
日本に帰国し、ヴィジュアルデザインを学んでいた頃、故郷で建設業を営んでいた父が公的な助成金を獲得し、和紙を復興させて元気にしようというプロジェクトを立ち上げました。何かできるか?と問われ、それがきっかけで「ゼオライト和紙」の開発、発表、販路開拓に携わったのです。この技術は愛媛県の産業技術研究所と父の会社との共同開発で、父の建設会社も付加価値の高い建築部材を開発し、リフォーム市場などに提供しようと考えていました。私はと言えば、様々な経験がここに来てやっといい感じに実を結びつつあるのを感じました。（笑）

裏山には名水百選に選定された豊富な観音水の水が紙漉きに使えます。ゼオライト和紙は、楮を五～十cmにカットし、バケツくらいの大きさの耐熱ボトルに秘密の溶液を入れて密閉し、二週間漬け込んだ後、二十四時間九十度で熱し、ゼオライト鉱石の微粒子を繊維に担持（付着）させます。出来上がったメンマのような楮を何度も晒して色を落とした後、長刀ビーターで叩解し、紙料にします。多孔質の穴があるため、調湿、消臭効果に優れ、ホルムアルデヒト等を吸着する「呼吸する和紙」です。インテリア部材に仕上げるには、紙縒りを一筋、一筋、手作業によって木型に架けて土台にし、ゼオライト楮を薄い層で普通七～八回に分けて少しずつ重ね、溜め漉きします。網状の土台も紙料のゼオライト和紙も紙なので、よく接着し、丈夫です。全て自社工房で手作りするオーダーメイドで、紙縒りのバリエーションや染色、厚さ、異素材の合わせ漉きなど、多様なインテリア和紙を提案・制作しています。



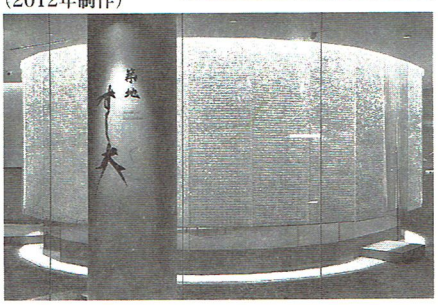
▲3Dプリンターで制作したジョイントパーツを使用した形の変わる照明器具

手漉き和紙のボール



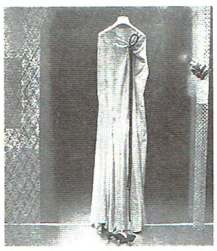
呼吸する和紙のモビール（2010年制作）

▼築地すし大 シンガポールマリーナマンダリンホテル（2012年制作）



●軽やかなインテリア和紙

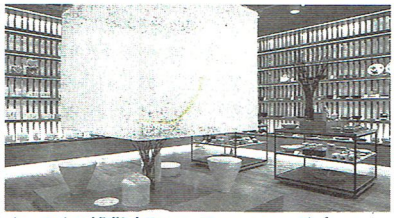
私の中には、常にアート・デザイン・工芸という三つの軸があり、使い分けながらクライアントの要望に応えますが、底に自分らしい根幹があればいい。現在までに納入した処は、シンガポールのマンダリンホテルのお寿司屋さんや、世界的ファッションブランドのショールーム、伊勢丹新宿店のウィンドーディスプ

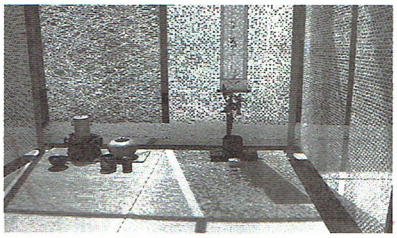


伊勢丹新宿店のディスプレイ（2018年制作）

レイ、道後温泉飛鳥の湯のエントランス装飾、東京在住の裕福な外国人の私邸、アジア諸国のコンドミニアムなど様々ですが、いずれも工務店、建築事務所、インテリアデザイナー、デヴェロッパーからの直接注文です。サイズも大きく単価が高いので、やはり高級路線を基本に置きたいですね。海外のお客様は制作工程を全く知らないので、「一か月で納品できる?」などとオーダーしてくる方もいます。その時は正直に無理とお伝えし、回転が速いファッション業界や有名なクライアントさんだからといって振り回されずぎず、良い質のものを提供できるよう心掛けています。

インテリア和紙は、工芸的な重厚感を表現するのではなく、北欧風インテリアに人気があるように、より現代生活にマッチした明るく伸びやかで、空気のように軽やかな和紙が求められていると思います。また、レンガの家に靴のまま暮らす文化と靴を脱いで和紙が破れない所作で暮らす日本文化の違いなどをお話ししますが、海外の方には、作り手もきちんと説明できる「語彙」が求められますね。商業施設などに設置する場合は、モダンできっちりとした工業的な納まりも必要です。


インテリア雑貨店FrancFrancシンガポール（2011年制作）


内田繁 茶室　識庵（2010年制作

レポート

■「越前装飾料紙シンポジウム」開催

昨年五月、紙祖神岡太神社・大瀧神社千三百年大祭・御神忌が行われ、記念すべき平成三十年、十月二八日、「越前装飾料紙シンポジウム」が「あいぱーく今立」（越前市）で開催された。プログラムは以下の通り。

講演一　かな書道と平安の装飾料紙（名児耶明-五島美術館副館長）

講演二　現代に甦る四種の料紙と仮名表現（高木厚人-大東文化大教授）

講演三　源氏物語に見る紙の彩（吉岡幸雄-染司よしおか　五代当主）

報告一　装飾料紙復元の試みについて（五十嵐康三-全和連会長）

パネルディスカッション（総合討議）講師全員

報告二　越前生漉き鳥の子紙保存会活動報告（柳瀬晴夫-保存会会長）

●「平安の装飾料紙復元プロジェクト」と現代かな作家の展覧会

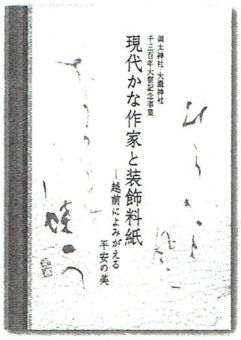
平成二十六年、東京に本部を置く和紙文化研究会は、初めて東京以外で年次大会「和紙文化講演会」を開催し、これを機に越前和紙との装飾料紙の研究が始まった。翌平成二十七年には「越前生漉鳥の子紙保存会」が設立され、同年、和紙文化研究会、保存会、その他多くの専門家の協力の元、「平安の装飾料紙復元プロジェクト」が立ち上げられた。美術史家、装幀・修補技術家、製紙繊維研究家、書家らが越前を度々訪れ、福井県和紙工業協同組合が中心となり、漉き手と対話を重ねた。そして専門家の指導の元、漸く平成三十年、平安の優美を彷彿とさせる装飾料紙四種（打雲、飛雲、色紙、羅紋）の復元にこぎ着けた。中でも、製法が伝えられておらず、数百年失われていた幻の技法、本邦初の「羅紋紙」の復元は、この催しのハイライトで耳目を集めた。

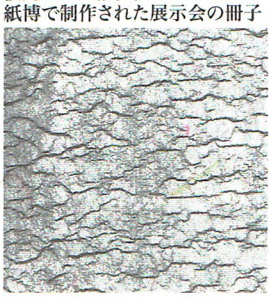
会期中、紙の文化博物館（越前市）では、完成した平安の復元紙に現代のかな書作家が揮毫（きごう）した書作品を展示。作品は、書家が復元紙を見て、模様の出方や方向を自由に使い、その紙に合う自らが選んだ和歌や俳句、詩をかな書で書くという画期的な試みで、繊細なかな書と装飾料紙が干渉し合う風雅な秀作がそろった。越前には、古くからの「打雲」等の装飾技法が伝えられているが、それは主に江戸期のもので、平安時代の遺物として残っている装飾料紙とは趣を異にする。

大東文化大学教授でかな書の書家でもある高木厚人氏はシンポジウムで、料紙に向かった時、書き手の心がどう動くかを和紙とかな書のレイアウトの例などを挙げ、作品を解説した。紙の復元には地元の手漉き和紙工房数社が携わったが、そのひとつ、「五十嵐製紙」の五十嵐康三氏は「今回、各分野の先生方は強い思いで協力して下さり、何度も当時のものを見せて頂いて、繊維の分析、色へのこだわり、模様の大きさ・形・雲の形状等の細部に至るまで検討を重ね、幾度も試作を重ね、平安時代のものに近いものを再現できたと思います」と感想を述べた。

かな書道の世界では、平安の料紙が尊ばれるが、現在手に入るのは印刷された既製品が多い。日本文化の大きな水脈の一つ、平安期の紙を復元することは、紙の技法研究の面からも大きな意味があり、また、かな書作家にも愛用者を増やすことにも繋がると産地では期待している。

シンポ会場で復元紙の展示




復元された羅紋紙と紙博で制作された展示会の冊子

●講演一-「かな書道と平安の装飾料紙」名児耶明氏（五島美術館副館長、書道史）

中国から紀元前後に日本に伝来した文字は「篆書体」で、それから四〇〇年経つと、漢字であっても日本語音の表記が見られるようになる。

仮名の成立は、奈良時代の万葉仮名の一字一音の日本語表記から、平安時代に入ると大きく前進するが、始めから現在のような簡略な文字になった訳ではない。九〇〇年代前期に勅撰和歌集として最初に編纂された「古今和歌集」は、仮名の整備のきっかけになった書物ではな

平安期の和紙の美を討議するパネルディスカッション

いかと思われる。様々な九世紀頃の文字資料の遺物を見ると、複雑な形状、字の形や崩し方にも多くの種類があり、万葉仮名や草書体、草仮名（万葉仮名の草書体）、平仮名、仮名の前段階のものなどが混在していたことが分かる。このようにして、仮名が完成を見るのは一〇〇〇年前後なのである。

装飾料紙は、まず藍を主体とした色紙から始まる。「紫紙金字経」「紺紙銀字経」に加え、「色紙経」と言われる写経が伝存している。雲紙（打雲）の最古例は平安時代の伝藤原行成筆「和漢朗詠集」二巻に見られ、対角線の上下の端に濃めの藍のむら雲が漉き込まれている。平安時代以降は次第に藍の色が濃くなり、意匠性に意識が向いていく。江戸期に入ると短冊が登場し、上部に藍、下部に紫の雲を配したものが定番となる。一方、飛雲の最古例は雲紙より古く、藤原行成筆の詩歌断簡と言われ、大きめの藍と紫の雲が浮遊するようにすき込まれている。その後、飛雲は次第に小型になり、平安の十二世紀頃にはなくなってしまったといわれ、鎌倉時代の古筆には確認されていない。平安の装飾料紙は、自然の美しさや移りゆくはかなさを表現したかったのではないか。今回復元された「羅紋」も、私は水の波紋を表しているのではと考える。日本の紙のデザインは、平安の原点に立ち返り、自然美や調和を基礎とした美意識に彩られるなら、まだまだ可能性があると考える。

29日の工房見学会の様子

名児耶明氏

特別寄稿

■歴史に残る福井・尾張藩札
河野徳吉（和紙流通史研究）

今日和紙の紙質、製造法には多くの研究があるが、和紙の売買、流通、商習慣、管轄部署などは意外に知られていない。商品経済の発達によって通貨不足となった江戸期中期～後半、特に重要であった藩札用紙を巡る文書を辿ってみた。

●藩札紙の原料、雁皮の供給

福井藩は、延宝六年（一六七八）定書を出し、藩に必要な用紙の漉立てを三田村和泉を初めとする近江・山城・河内の四人に命じた。この受領名を許された家はまた、高橋・清水・加藤の姓を名乗る家でもあり、他国へ出す諸紙の改め役の特権をも与えられ「御紙屋」と呼ばれる。この体制は暫く続いたが、元禄十二年、「紙会所」が設置され判元制の元、本格的な専売制が実施される。

誓書

一、今度、お札紙御漉替割合、河内方（加藤河内）へ被仰付出被仰聞候は、御大切之御用に候間、御札紙之紙草取合、其他漉立之儀手掛候ものは不及申、見及承申儀共、他人は不及申、親子兄弟たりと云ふ共、一切語り申間敷候、其上、落散候紙屑等有之候はば、不隠置御渡可申上候事。

一、外より誂（あつらい）の品にて似寄候紙漉立候者有之候はば、早速主人方江可申達事。（中略）万一にも之に背く者は、梵天帝釈四大天王、惣而日本国中大小神祇、伊豆箱根両所権現、三嶋大明神、天満大自在天神。右前書之趣於相背者、神罰冥罰可羅蒙者也、仍起請文如件

加藤河内

奥書

宝暦四申戌歳二月（一七五四）

伊助 庄助 佐助 小助 佐弥 さよ よし（血判）

越前五箇村の御紙屋加藤河内は、宝暦四年（一七五四）二月、福井藩札の漉替に際して、勘定奉行に誓書の提出を行った。この三五五年前の誓書は、五箇の河内と七人の署名血判入りの威厳あるものであり、藩札が漉替という極秘かつ容易ならぬ事態に、必ずや神罰・冥罰が下るのでは、と恐れおののきながら紙を漉いていた様が伺える。

お札用紙の原料は雁皮としているが、何分全部漉替なのでかなりの量が必要である。ところが越前にはこれに応じるだけの雁皮が山里にないので、近隣の若狭藩領産の材料を仕入れていたと文政二年（一八一九）卯年三月の文書に記されている。

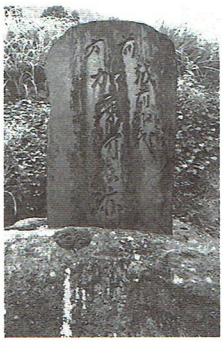
雁皮仕入元金の融通を願った文書には、尤も上等な雁皮は若狭の三方郡東郷近くの崖の中に自生する若狭藩が大切にしている特産品であり、自由に他国の移出を許さなかったが、五箇の加藤河内と紙屋衆には供給していた。この文書には、五箇郷に駐在している紙会所の役人が、若狭領の三郎左衛門と申す者に、鳥の子紙の原料である雁皮の買付を依頼したところ、早速雁皮の積を送ると約束したものの、日限を過ぎても送ってこないので催促したが、若狭藩の役人がその荷物を差し留めしたとある。その理由を調べてみると、雁皮を原料とする鳥の子紙製造を越前が独占しているのを快よく思わず、雁皮の値段の駆け引きと嫌がらせをしたのであった。ともかく越前領には雁皮そのものが少なく、栽培する能力がなく、鳥の子紙の生産が乏しく悩まされていたことは事実である。

●自由な漉立て禁止

一方、文化三年（一八〇八）二月に行われた福井藩藩札漉立に関する記録によると、雁皮の入方は、一たてに付、飯椀に三杯と定めてあるが、五月になると四杯となっている。また、舟の水は十月から翌年の四月までは、大量にして金尺五尺二分、漉上には小水でよいと記してある。ノリは初め一升八合を要するが、十月から正月までは一升二合でよく、夏になるほど多量に使うこと、また舟替えは、まず七、八日を限度にすることも記されている。

お札用紙の鳥子は元々禁制品であるから、いかなる場合でも自由な漉立ては禁じられ、すべて紙会所の許可がなければ抄製することができなかった。やむを得ない注文のあった折は、紙会所へその旨を届出で、その指図を待って漉立てることになっている。

午閏五月の加藤河内の奉行宛口上書には、突然永平寺の塔頭から不老村の伊左衛門方へ鳥子紙の注文があったが、それを知った加藤河内はすかさず奉行所に御慈斐御憐の願いと厳重取締り方を願い出ており、また他藩から直接一般の紙屋に注文があった場合は、御奉行または紙会所に伝え、五箇の御紙屋と相談の上、藩の許しを得てから仕事にかかるようにしてほしいと願いを出している。


岩本地域に残る越前和紙加藤河内井堰

●諸藩から藩札用紙の注文

三河西尾藩からの「文字漉入広紙」の注文や、文化二年(一八〇五)二月の多量の尾張藩札用紙の注文に際してもやはり前と同様、五箇の紙会所から許可を受けている。尾張藩から御紙屋河内が受けた注文は、黄、赤、青の三色文字漉入のもの六万枚であったが、この紙は岩本、新在家、定友の御紙屋とその他の漉屋が協力して抄製納入している。天保二年(一八三一)にも同様の注文があったが、他藩から注文された紙と越前藩札とが同様のものであったかどうかについては多少疑わしい。河内は嘉永七年(一八五七)に丸岡藩からも注文を受けたが、福井藩奉行宛の願書と口上書には、「尤雁皮漉之儀は、御注文の儀に御座候へば、全相守、外の御札紙は一切大豆漉に仕候」とあり、大豆漉とはどんな抄法であるか、はっきりしないが、大豆を臼で挽き、その液汁を混合したもので、割合厚手の紙ができたと考えられる。

天下の雄藩たる尾張藩に対しても、恐らく人知れず、尾張の御用紙漉職辰巳新左衛門(九代)、鉄之助(十代)の抄造に何らかの差別を施したのではあるまいか。その間の消息がはっきりしていないが、天保二年(一八三一)卯五月に、「尾州様、御札紙、大瀧村喜右衛門方へ、御誂被遊候に付、如此願書紙御役所へ指出申候」と次の起請文前書之事」が細かく記され、色紙の製法は漏らさないこと、余った紙を横流ししないこと、尾張藩が親藩であるのでやむを得ず受けた急な注文で御紙屋斗では対応できないので、親類と協力して漉くこと等が届けられている。この文書から越前藩札とは、何等か別様の紙を製する黙契が紙会所と紙匠達の間に成立していたものと推察できる。尾張藩の藩札注文は、黄二万七千三百枚、赤一万九千八百枚、白一万五千三百枚、計六万二千四百枚であったが、これらは同年五月中旬に抄製に着手し、九月下旬にすべて納入したと記録されている。越前産の藩札の紙質は極めて良質でかつ重厚なものであり、歴史に残る藩札であった。

岳買入手形
嘉永三戌改　一八錢五匁也　左川紙買方　印
力千百八十二

福井藩、尾張藩でも、文政年間(一八一八)から、藩内における通貨不足を緩和する目的で、藩札を開発できる技術を有し、信頼性のある御用紙漉職方に代用貨幣を製造させたのである。藩札を作る御用紙職方集団は、透し模様入、雁皮・楮・麻・穀の原料の調整による紙の寿命や印刷手法の向上、藩札の黄・赤・薄青色の色彩の管理、城下町の両替商、札場日付、名主豪商、大店舗の監視と偽札防止、汚れた札・破損の回収を指導した。

福井藩と尾張藩は、なぜ局地的通貨の金・銀札から離れることができたか。藩は商業制度、古い通貨の仕来り、慣例、市場の動向、集団の行動、商品の荷倉などを細かく監察し、勘定奉行に報告させていたためであろう。その経緯については、尾張藩武井右衛門、代官鈴木彦助、三澤喜右衛門による「札紙漉立方被仰付たる初度」「永代記録」から知ることができる。また拙著「尾張藩紙漉文化史」の巻末に細かく記している。

情報欄

●イベント情報

■テーブルウェア・フェスティバル2019　暮らしを彩る器展
時:2019年2月3日(日)～2月11日(月)
場所:東京ドーム
内容:越前和紙展示・販売

■紙の文化博物館企画展示　局紙-明治生まれの越前和紙
時:2月6日(水)～3月25日(月)
場所:紙の文化博物館
内容:越前和紙の近代化を象徴する局紙とそのなりたちを、製作道具や資料と共に展示します。

■越前和紙展「装飾料紙を極める」　越前の技にて平安時代の羅紋・打雲・飛雲・いろ紙を復元
時:2月18日(月)～2月23日(土)
場所:東京日本橋「小津ギャラリー」
-特別揮毫作品展示
-墨流し体験(22日・23日)
福井県無形文化財技術保持者　福田忠雄氏

■第31回今立現代美術紙展
IMADATE ART CAMP 2019春展
時:4月27日(土)～5月6日(月)
場所:各漉き場・越前市いまだて芸術館

■×和紙展　触れる和紙(青年部会展)
時:4月20日(土)～5月26日(日)
場所:卯立の工芸館　2階

■岡太神社・大瀧神社春季例大祭
時:5月3日(金)～5日(日)
場所:岡太神社・大瀧神社(越前市大滝町)

■神と紙のまつり(大掘出し市)
時:5月3日(金)～5日(日)
場所:和紙の里通り(越前市新在家町)
内容:特設テント和紙販売、バザー、クラフト教室など

■第48回金沢ペーパーショー2019
時:2019年6月14日(火)～18日(木)
場所:石川県産業展示館
内容:展示、体験あり

●新刊紹介

「紙が語る幕末出版史:『開版指針』から解き明かす」
-白戸満喜子著
-2018年12月
-文学通信刊、10,260円
和紙から洋紙へ、和本から洋本へ、紙分析を通して書物の近代化を辿る新しい日本幕末出版史。

●「季刊-和紙だより」は新しく生まれ変わります。

15年間、和紙に関わる人々、ビジネス、産地の動きなど、様々な情報をお届けしてまいりました「季刊-和紙だより」は、新年度から、より迅速な情報をお伝えするSNSと紙媒体(年2回程度)の2本立て情報発信に衣替する予定です。皆様、長い間のご支援とご愛読ありがとうございました。

「季刊-和紙だより」編集長:右衛門佐美佐子
誌面デザイン:田中裕子

編集後記
「季刊-和紙だより」は今号で一応の区切りとします。発刊当初から、限られた誌面だけに、越前だけではなく、硬軟取り混ぜた、解りやすく、内容の濃い記事を、和紙に関係ある方々に広くお読み頂きたいと努め編集してまいりました。編集人が面白いと思う、いくつものテーマに出会えたことは何よりの幸せでした。(よ)

季刊・和紙だより 第61号(2019年冬号)　発行日:2019年2月10日　和紙だよりURL→http://washidayori.jimdo.com/
発行人:福井県和紙工業協同組合　石川浩　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所:Office YOMOSA　〒520-0025　滋賀県大津市皇子が丘1-6-6 #209　Tel/Fax: 077-523-4172　E-mail: myomosa@mx5.canvas.ne.jp
編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子　印刷所:有限会社新進堂印刷所(京都府宇治市)　用紙:機械漉き大礼紙(石川製紙株式会社製)
※無断での転写・転載はお断りします。